

## ストックホルムの乳幼児教育

26日の午後はストックホルムでの自由行動。といっても初めてなので右も左も分からなくて「不自由」行動である。「自然に興味があるのなら Skansen がいいんじゃない」とすすめられて、出かけた。



Skansen というのは日本の「明治村」のモデルとなった野外民俗博物公園である。広大な土地（元王室の狩猟場だったという）にスウェーデンの全国から家や建物、動物などを集めた博物館と動物園である。市街地から路面電車でもフェリーでも 30 分とかからなくて行くことができる（共に片道 40 スウェーデンクローネ）。ベビーカーの家族連れも多い。鼻腔チューブをつけた車椅子の人にもあった。

さて、この Skansen から対岸を眺めると小高い山（丘）が見える。



どう見ても人工のものである。気になるので翌日、通訳の藤井さんに聞いたところ、「ゴミを積み上げてできた山で、スキー場になっている」とのこと。「夢の島」ならぬ「夢の山」である。

移動の途中でスウェーデンの環境に対する取り組みの一端に触れることができた。

ハンマンビョショースタッドの住宅街はエコ住宅地として再開発された。

対岸のゴミ処理場から供給されるバイオガスを利用している。

年間 12000 km 以上走らない人は自家用車を持たず、共同の車両をシェアするのだ。

27日の午前中に GranBacka Skolan 基礎学校の障害児学級の視察を終え、午後はフィルクローベン保育園（幼児教育）の視察である。

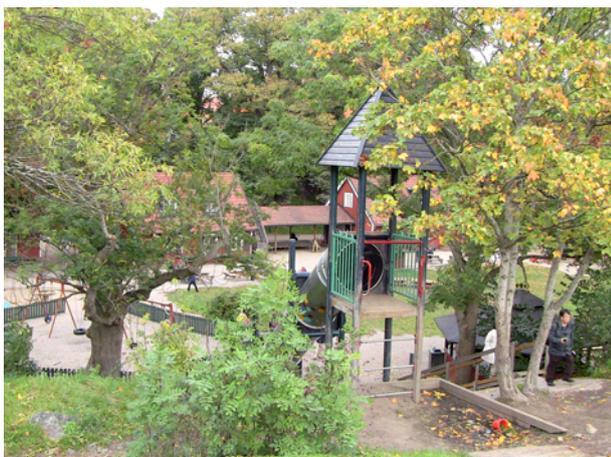


園長先生と障害児教育の資格を持った副園長先生が説明と案内をしてくれた。

スウェーデンでは共働きが当たり前である。1歳から就学前までは幼保一元化がなされた幼稚園に通うのだ。幼保一元化によって、管轄が社会省から教育文科省に変わったことと、指導者の資

格が高卒で取れた保育士から大学卒の教諭の資格(幼児教育)がいるようになったことだという。

保育内容は、日本の幼稚園のように早期から文字を教えたり、お絵かきやお遊戯をさせたりするのではなく、子どもたちの興味を引き出し、関心を高める遊びが主に行われている。見学したところでも午前中に近くの公園や少し離れたあそびの場(専任のスタッフもいて、幼稚園の子ではない子どもも遊べる。休み時間に近所の小学生も遊びに来ていた。)で遊ぶ姿が見られた。



全体で120人の園児がいるが、その中に8名の自閉症の診断を受けている子どもたちが入っている(この園では最高10名までしか受け入れないと園長はいていたが、園によって違う)。

障害児教育の専門的教育を受けた先生がいる。特別なトレーニングをするための部屋がある。

自閉症センターと連携しながら、一人につき週20時間の特別な教育が受けられる。子どもによって、一人でトレーニングを受けた方がいいのか、集団でトレーニングを受けた方がいいのか判断される。家庭と同じことをする必要があるので、外部から指導者にきてもらってここでトレーニングが受けられるようにしている。

トレーニングの内容は、応用行動分析(Applied Behavior Analysis: いわゆるABA)に基づいたアプローチ。アセスメントに基づいて、個別計画が立てられ、トレーニングがなされている。

各々の学習は、小さなステップに分けて行われる。望ましい反応や答えは、好きなもの(おもちゃ、おかしなど)をあたえたり、ほめたりして強化していく。習得されるまで、何度も繰り返し練

習される。

見学したところはカードを使った単語や数字の学習であったが、粗大な運動のトレーニングなどもするとのことである。

日本の見学者たちは幼児教育での考え方と自閉症児の訓練の考え方にギャップを感じたのだが、ここの幼稚園の先生は特に矛盾しているとは思っていないようだ。

見学した全障研の面々は保育内容については何となく欲求不満であった。

先生にくすぐられることが「好きなこと」なので、成功するとくすぐられて喜んでいた子どもの姿を見て、ほっとしたのは私だけだったろうか。

もっと私たちが自閉症児への「訓練的」ではないアプローチがあることを発信していかねばならないと考えさせられた。

